

簡牘文字「各」傍の省略

曹 方
草 野 友 子 向
野 友 子 向

キーワード：簡牘文字、省略、同化

文字の「簡化（簡略化）」と「繁化（複雑化）」は、古文字の中で共存する現象である。たとえば戦国文字の「各」に従う字は、省略されて「久」となるものがあり、これは閲読の妨げになる。また、元々「久」に従うものが複雑化して「各」となるものもあり、この場合も閲読の困難を引き起こす。本論では、この「各」の字と関連する字形とを例として、書写の方面のいくつかの問題について検討してみたい。

一、整った「各」傍の書法

簡牘文字の中の独立した形体の「各」と、偏や旁としての「各」は、主に四種の整った書法がある。便宜上、その四種を甲・乙・丙・丁としてまとめると、【表1】のようになる。

【表1】を見ると、「各」あるいは「各」に従う字は、甲のような書法が主流であり、丙の書法は比較的少ないことがわかる。また、乙・丁の形体は、現在わずかに葛陵楚簡と曾侯乙墓竹簡のみに見え、葛陵

楚簡の書写者は「各」字の基本的な筆画について特殊な書写習慣を持っていたと考えられる。これらは、通常の状態下において、「各」の書法はかなり安定していたことを物語っている。

二、「各」と関連する複雑化した字形

「各」は、「久」に従い、「口」に従う字である。ある文字は元々「各」に従うものではないが、「久」に従うものであり、「久」の下に「口」旁が加えられたために、「各」に類似する形体が出現した。たとえば、【表2】のような例である。

「後」の例については、中山王鼎の銘文は一般的に晋系文字と見なされている。斉系の陶文の例は「口」に従っていないが、一方、後生戈は斉系の兵器の銘文である。¹⁾ただ、これらの字が表す語句はいずれも明確であり、閲読の際に大きな影響はない。

また、「徴」字については、別の形体を後に検討するため、【表3】として単独で列記しておく。²⁾

類型 字形	甲	乙	丙	丁
各	 郭店『語叢一』107	 葛陵乙三 41	 上博『曹沫之陳』65	
茗	 信陽 2-28	 葛陵甲三 42	 郭店『窮達以時』13	
路	 包山 159			 曾侯乙 179
鶴	 上博『陳公治兵』3	 葛陵甲三 322		
答	 包山 223	 葛陵乙二 8		
絡	 包山 227  睡虎地 日書甲 77 背面	<p>【簡牘資料概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・郭店（郭店楚簡）：1993年に湖北省荊門市の郭店村から出土した戦国時代の楚の竹簡。 ・上博（上博楚簡）：1994年に上海博物館が入手した戦国時代の楚の竹簡。 ・葛陵（新蔡葛陵楚簡）：1994年に河南省新蔡県の葛陵村の楚墓から出土した戦国時代の楚の竹簡。 ・信陽（信陽長台関楚簡）：1956年に河南省信陽市の長台関1号楚墓から出土した戦国時代の楚の竹簡。 ・曾侯乙（曾侯乙墓竹簡）：1978年に湖北省随県で発掘された戦国早期の墓から出土した竹簡。この墓からは青銅楽器等も多数見つかっている。 ・睡虎地（睡虎地秦簡）：1975年に湖北省雲夢県睡虎地の秦代の墓から出土した竹簡。 ・包山（包山楚簡）：1986～87年に湖北省荊門市の楚墓から出土した戦国時代の楚の竹簡。 ・清華（清華簡）：2008年に清華大学が入手した戦国時代の竹簡。 ・天星観（天星観一号墓竹簡）：1978年に湖北省江陵県の子星観一号墓から出土した戦国時代の楚の竹簡。 		
洛	 上博『天子建州』乙5  清華『繫年』17			
絡	 天星観			
珞	 包山 167	*表内の算用数字は、竹簡番号（以下、同じ）。		

【表1】「各」および「各」旁の簡牘中における書法の例

	後	退	復			
字形	 上博『競建内之』4	 上博『曹沫之陳』30	 上博『用曰』19	 郭店『老子』甲39	 郭店『成之聞之』19	 上博『弟子問』5
	 清華『繫年』132	 中山王鼎	 行氣玉佩銘 (戦国初期の玉石彫刻)	 中山王壺 (戦国時代の中山国の王墓群から発見)	 清華『楚居』8	 清華『命訓』10
	 陶文 (古代の土器に書かれた銘文)	 後生戈 (齊系兵器)				
	 清華『良臣』5					

【表2】「口」旁を加えたために形が「各」と同様になった例

徵	各	
 曾侯乙編鐘鐘架銘文	 温泉盟書 (1980～82年に河南省温泉で発見された同盟の誓約書)	
 上博『采風曲目』3		 郭店『語叢一』107
 商父之徵石磬 (2005年に河南省上蔡県郭荘楚墓から出土した、石でつくられた平板の打楽器)		

【表3】「徵」と「各」

「後」「退」「復」等の字とは異なり、「微」、曾侯乙墓石磬、上博楚簡『容成氏』41『』の右側)の字形は「各」に従う字との混用が生じた。また、『説文解字』において「微」の古文は「𠄎(𠄎)と書かれ、上博楚簡『周易』54の「」の字と比べると、「口」旁が多く、明らかに「各」の存在がある。

この他、次の信陽1-1のような字は、ある学者は「𠄎」とし、「各」の異体字であると考えた。³⁾ 赤外線写真によると、この字は上下二つの「各」が重なっている、すなわち二つの「各」が重複して書かれたもので、これも「各」の複雑化であると考えられる。



信陽1-1 赤外線写真 (『楚地出土簡冊合集』より)

ただ、この字と次の字形 (「𠄎(回)») とを対比すると、



上博『民之父母』10



上博『顔淵問於孔子』10

信陽楚簡の字も「𠄎(回)」（この字は「𠄎」と積読できる）である可能性があり、下部の「𠄎」の下に「口」の旁が加えられて、二つの「各」のようになったのかもしれない。しかし、信陽1-1の字形中の「𠄎」の「𠄎」(右払い)の筆画方向は、「𠄎」字との区別があるため、やはり「各」に従う字と解釈するのが妥当であろう。二つの「各」を重ねて使用するの、戦国文字ではよく見られる複雑化の現象である。

三、「各」と関連する簡略化した字形

「各」字が省略される際には必ず「口」旁の部分省略され、これは、もし「𠄎」を省略すれば「各」の字を連想することが難しくなるからである。問題は、第二章で検討したいくつかの字のように、普通は「各」であることが誤解されないはずが、「各」の「口」旁が省略されて「𠄎」と書かれたことで、別の字だと誤解されてしまう場合があることである。その例を【表4】に掲げる。

代替符号	字形	辞例
A	 郭店『性自命出』60	凡于A勿畏、毋獨言。
B	 郭店『成之聞之』31	天B大常、以理人倫。
C	 上博『季庚子問於孔子』15	先人之所廢、勿起、則民C不善。
D	 上博『容成氏』31	高山D
E	 清华『耆夜』10	(蟋蟀) E於堂
F	 郭店『窮達以時』7	釋板F而爲朝卿
G	 上博『昭王毀室』1	既G之

【表4】「各」の省略に従う可能性がある関連字形

類型 字形辞例	D	D1	D2	D3	D4
字形					
竹簡番号：辞例	31：高山～	39：～賢	39：～自戎遂	48：～文王	40：降自鳴条之遂

【表5】『容成氏』の字形D

Aは郭店楚簡『性自命出』のものであり、同文献と見られている上博楚簡『性情論』と対照して読むことができる。上博本の対応する語句は、「凡于道路勿思（畏）」であり、Aは明らかに「道路」の意味である。李零氏はかつてAは「路」の誤字であると見なしていたが、今見ると、Aは文中では「路」（上博楚簡『平王問鄭寿』ではと書かれる）で、道路を指しており、「各」の「口」旁を省略しただけのものであると考えられる。⁵⁾

Bは、陳偉氏はかつて「降」と解釈し、後に改めて「格」と解釈した。一方、李学勤氏は「徵」の省略であると見なしている。また、李零氏は「陞」であるとし、「降」の誤写である可能性も指摘しているが、今なお定論はない。⁶⁾

Cは、整理者は「疋」（しんにょう）に従い「坐」に従う字であると考えているが、この見解には賛同できない。

い。何有祖氏は「降」であると見なしている。⁷⁾ 陳偉氏は「陞」と解釈して「懲」の意味で読み、一方、楊沢生氏は「陞」と解釈しているものの「登」の意味で読んでいる。⁸⁾ また、劉信芳氏は「路」の省略であると考えて「路」と釈読し、俞紹宏・張青松両氏はCをAの省略と考えているが、その解釈についての具体的な説明はない。⁹⁾ 筆者は、CとAとは同形あり、「格」と読むことができるのではないかと推測している。たとえば、『論語』為政篇の「有耻且格」の「格」は「正」という意味であり、簡文の「格不善」は「不善を正す」という意味であると考えられるからである。

以上の字形は、AとCはいずれも「疋」に従うものであり、BはおそらくAの字の「疋」旁が省略された結果である。

Dは、上博楚簡『容成氏』に見える字であり、この文献には関連する字形が多く見られる。【表5】の字形は、包山楚簡の次の例を想起させる。

 (包山2) ↓  (包山48) ↓  (包山37)

D1・D2・D4のような書法は、意識的に「欠」の上部を突き出して書いており、「徵」の「山」の形の筆画とさらに近づき、これによって省略された「山」の形を示している（包山楚簡2や上博楚簡『容成氏』41には「山」の形があるが、包山楚簡48等は「山」の形がないものである）。そのため、これは「徵」字の変形音化の結果であると見なす人もいる。¹⁰⁾ Dの相関字形を検討したもので、「各」の省略にまで

E		『耆夜』10 : E 於堂
E1		『命訓』2 : E1 之禍
E2		『繫年』6 : 乃 E2 西戎

【表6】清華簡の字形E

関連づけているものは少なく、それは上下の文の制限があるためであるが、一方で、これらの字がいずれも「阜」（こざと）に従い「辵」に従うものではないことと関係がある可能性がある。このことから、現在の条件下では、「辵」を根拠として、A・Cと「阝」（陞）／「微／降」の系列の字とに区分することができるともされない。

Eの字については、清華簡には【表6】のような字例があり、『耆夜』の整理者は、「降」の異体字である可能性と、「陞」の字である可能性の二つを示している¹²⁾。清華簡『命訓』には「降之禍」とあり、「降」はE1のように書写されている。清華簡『耆夜』の整理者は、「蟋蟀」（E於堂）のEは「降」あるいは「阝」の可能性がある

とすでに指摘している。確かに、「禍」はただ天から「降」されるが、蟋蟀（こおろぎ）は「堂より降りた」とも、「堂に上った」とも考えることができる。張新俊氏は、E2は「阝」の誤字である可能性も考え、E2を「徵召」の「徵」と積読し、西戎に向けて兵を貸すことを指すとする¹³⁾。王輝氏は、張氏の見解は似て非なるものであると見なしており、王輝氏の見解はさらに道理がある可能性がある¹⁴⁾。E1を根拠に見ると、Eは「降」の字であると考えられる。この字形は「各」と混用されることはないため、本論では議論しない。

Fは、「木」に従い、「土」に従う字であるが、この字はこれまで多くの解釈があり、たとえば「箠」や「枚」と積読し、放牧の際に用いる鞭を指すと考えるものがある¹⁵⁾。筆者は、FはA・B・Cと同じく「各」の省略に従うものであると考えている。この字はおそらく「格」である。『莊子』胠篋篇に「削格羅罟罟之知多、則獸亂於澤矣」とあり、陸徳明『經典積文』に「削格、所以施羅網也」とある。先秦時期において、「格」は網を張る木の杙を指し、「板」と並列させれば、放牧の囲いの柵を指すと考えられる可能性がある。

Gは、現在、一般的にその上部は「各」の省略と見なされ、「落」と積読し、落成式のことを指すと考えられている。

先に述べた字形は、「阜」がA/CとE/E1とに区分することを助けるが、E・E1の右側とA・B・Cの書法はほとんど同じである。また、BがA/Cの省略なのかどうかを確定する方法はなく、やはりE1の省略であると見られる。

四、「口」の省略とその問題

「各」の字が省略されるのは、「口」隣の部分である。では、直接省略されるのであろうか、それとも別の省略方式があるのであろうか。

「口」隣の省略には大きく二つの方式がある。一つは、「口」が二つの横画で書かれ、再び省略されて一つの横画になるというように、省略が続いて「口」旁が消失してしまうものである。もう一つは、二つの横画で書かれる際、近くの横筆を借用するものである。

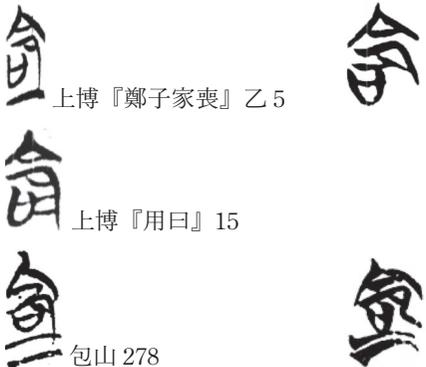
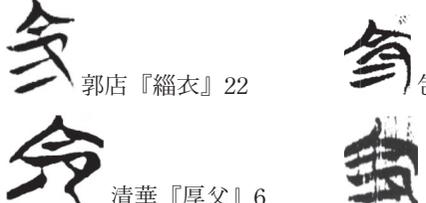
【表7】を見ると、命2では「口」が消失しており、ただ横画が二つあるは一つあるだけである。命1には「口」があり、同時に二つの横画あるいは一つの横画がある。ただし、上博楚簡『王居』の「命」字は一例にとどまらず、横画が二つあるいは一つの書法はあるが、命1のような書法はない。そのため、命2のうち横画が一つのものは、先に「命」の「口」旁を二つの横画で書写してから、再び省略されてきたものであると考えられる。

たとえば「含」(含)は、郭店楚簡『語叢二』13では「𠄎」と書かれ、この「口」も二つの横画で書かれたものである。¹⁶⁾

「口」旁は二つの横画で書くことができるため、近くの横筆を借用することもできる。たとえば「礪」は、次のように書かれる。

𠄎 (上博『周易』22) — 𠄎 (上博『曹沫之陳』39)

また、たとえば「凡」(凡)は、上博楚簡『天子建州』では次のよ

	よく見られる例	特殊な例
命		
命1	 <p>上博『鄭子家喪』乙5 上博『用曰』15 包山278</p>	 <p>清華『命訓』10 郭店『語叢一』2</p>
命2	 <p>郭店『緇衣』22 清華『厚父』6</p>	 <p>清華『程寤』3 包山139 背面 上博『王居』6</p>

【表7】「命」字の「口」旁の省略

うに書かれる。



ここでの「口」は横画を一つ少なく書いており、これも筆画を借用したものであると理解できる。

さらに、たとえば「法／廢」は、次のように書かれる。



おそらくGの「各」傍は、「示」傍の二つの横画を借用したものである。しかし、A・B・Cの「久」傍の下方には横画がなく、筆画を借用しがたい。そのため、「各」の省略は、直接「口」傍を省略したものであると考えられる。

五、形体省略の原因

文字の構造は、書写に対して影響があるものである。たとえば、前述の「口」の省略については、直接省略される以外に、二つの横画を書く際に再び省略されるものもある。注目すべきは、楷書の段階では、「口」はたとえ素早く雑に書かれていても、普通は二つの横画で書かれることはないということである。「口」が二つの横画で書かれるのは、当時の「口」字の筆順と現在の楷書の筆順が異なるからであろう。当

時の人の「口」の字の構造に対する理解が現在とは異なるとも言える。



一方で、竹簡の文字はすべて手書きされたものであるため、書写者の心理も考慮しなければならない。

一般的に言えば、「省略」は書写者が書写の速度を追求するために生じるものである。これは現代人の書写の心理とも合致する。現在、すでに知られている戦国竹簡は、大部分が個人の蔵書であり、その中には副葬するために専門的に書写されたと思われるものがあり、個人で書き写したものである。個人で書き写したものであれば、さらに自由に省略していた可能性がある。

しかし、一部の「久」に従う字は複雑化して「各」に従う字となり、書写速度の観点からの理解ができなくなった。これは書写者の「求同」（共通点を見つけ出す）という心理がもたらしたものであると考えられる。このような心理が働いて、いくつかの元々異なる偏旁が同化されたのであろう。



これらの字はいずれも「攵」に類似する書法を出現させ、これも書写の「求同」心理の体现である。当然、これらの偏旁が元々比較的近いことが、文字の同化の客観的な条件であると言える。

【注】

- (1) 字例については、徐在国・程燕・張振謙『戦国文字字形表』、上海古籍出版社、二〇一七年、二四五頁参照。
- (2) 字形の分析については、裘錫圭「古文字積読三則」（《徐中舒先生九十寿辰紀念文集》、巴蜀書社、一九九〇年。ここでは『裘錫圭學術文集』三、四三〇～四三二頁による）参照。字例については、前掲『戦国文字字形表』、一一九〇頁参照。
- (3) 前掲『戦国文字字形表』参照。
- (4) 上博本の「思」は「畏」の誤字である。李天虹「郭店竹簡《性命命出》研究」、湖北教育出版社、二〇〇三年、一九〇頁・二一五頁、および蘇建洲「拋楚簡「愧」訛變為「思」的現象考積古文字」、《戦国文字研究的回顧与展望》、中西書局、二〇一七年、二二六頁参照。
- (5) たとえば前掲『戦国文字字形表』二六五頁では、この字を楚系の「路」の書法の一つであると見なしている。
- (6) 『楚地出土簡冊合集』第一冊、文物出版社、二〇一一年、七九頁注「四〇」参照。この字の積読は現在でも定論がなく、たとえば前掲『戦国文字字形表』一九六七頁においては「降」字の下にこの字形を取めていない。
- (7) 何有祖「《季庚子問於孔子》与《姑成家父》試読」、武漢大学簡帛研究中心・簡帛網 (<http://www.dsml.org.cn/>)、二〇〇六年二月一九日。
- (8) 陳偉『季康子問孔子』零識(統)」、簡帛網、二〇〇六年三月二日。楊沢生「上博五零積十二則」、簡帛網、二〇〇六年三月二〇日。
- (9) 劉信芳「上博藏五試解統」、簡帛網、二〇〇六年三月二〇日。
- (10) 俞紹宏・張青松「上海博物館藏戰國楚簡集積」第五冊、社会科学文獻出版社、二〇一九年、一五四頁。
- (11) ここでのいわゆる変形音化は、字形中に見える「升」を指す形に近い字であり、「升」「徵」の読音は互いに近い。しかし、王輝氏はこれらの字形は「升」に従うものではないと指摘している。王輝「也談清華簡《繫年》「降西戎」的積読」、李守奎編『清華簡《繫年》与古史新探』収録、中西書局、二〇一六年、四八七～四九三頁。

(12) 李学勤主編『清華大學藏戰國竹簡(壹)』、中西書局、二〇一〇年、一五四頁。

(13) 張新俊「清華簡《繫年》曾人乃降西戎新詁」、《中國語文》二〇一五年第五期。

(14) 前掲、王輝「也談清華簡《繫年》「降西戎」的積読」、四八七～四九三頁。

(15) 前掲『楚地出土簡冊合集』第一冊、四五頁注積「二〇」参照。ただし、『合集』の編者は積文の中でどの字に読めるかについては明言しておらず、これらの解釈を完全に受け入れているわけではないと見られる。白於藍『戰國秦漢簡帛古書通假字彙纂』、福建人民出版社、二〇一二年、三六〇頁。

(16) 徐在国『上博楚簡文字声系』第四冊、安徽大學出版社、二〇一三年、一一八一～一一八二頁。

【附記】

本稿は、白川静記念東洋文字文化研究所主催オンラインシンポジウム「漢字文化の展望」において発表した内容に加筆・修正をして定稿としたものである。

本研究は、教育部青年基金項目「上博簡楚國故事類文獻研究」(15YJC770003) および国家社科基金一般項目「出土文獻所見楚王族資料整理與研究」(18BZS027) の助成を受けたものである。

曹 方向 (海南師範大學國際教育學院副教授)
草野友子 (日本學術振興會特別研究員RPD)

